

(論文内容の要旨)

本研究では、従来の生涯発達心理学において扱われてきた老年期の研究と、死の心理学的研究の知見の双方を統合し、意味と物語の視点を導入する必要性を考えて、ナラティブ・アプローチを試みた。そして老年期の死の意味づけについて、浄土真宗の僧侶と門徒に対して死の意味づけや物語を聞くインタビューを行って質的心理学の手法で精緻に分析した。さらに、生涯にわたる社会文化的文脈との関わりを通じて発達する死の意味づけを把握するためのナラティブ死生学の理論的枠組みを提案した。

第1部では、死の意味づけに関する理論的・方法論的検討として、とくに生涯発達心理学および死の心理学の立場から死の意味づけを巡るこれまでの研究知見と課題を概観し、本研究の目的を示した。

第1章では生涯発達心理学の特徴を示した上で、喪失そのものを肯定的に捉える「発達における喪失の意義」という新しい視点を導入すること、および個人の意味世界に目を向けることの必要性を指摘した。そして従来の研究では死と向き合うことによる人生の再統合が着目される一方で、死そのものが十分に扱われてこなかった問題を指摘した。

第2章では死の心理学的研究の現状と課題を検討した。そして当事者が死を意味づける能動的な側面を軽視してきたこと、他者との関わりや社会文化に流布する物語といった多様な社会文化的文脈を看過してきたこと、そして死の意味づけが生涯にわたり発達する側面を掬い得ていないこと、という問題を指摘した。

第3章では日本の高齢者の死への態度構造に関する先行知見を検討し、とくに死の問題に対する様々な解決の試みを提示してきた宗教と死への態度との関連について検討した。そして理論と方法論の乖離という従来の研究における問題を指摘した上で、これまで無批判に実施されてきた量的研究では意味の豊かさを十分に掬い得ないという方法論的問題を指摘し、当事者の意味づけを掬うことを中核的な特徴とする質的研究の有効性を明示した。

第4章では、ナラティブ・アプローチを採用して死の意味づけに迫ることで、従来の生涯発達心理学および死の心理学の課題がどのように解決できるのかを検討した。そして以下の特徴をもつ「ナラティブ死生学」を構想した。つまり死の意味づけの多様性およびアンビバレンスを掬うこと、社会文化に流布する物語や身近な他者との関わりを通じた死の意味づけに迫ること、生涯にわたる複数の死別や死を意識するような重篤な病の経験を通じて構成・再構成される死の意味づけを描出することを可能にすることである。

第2部では老年期の死の意味づけを、インタビューを中心に研究した。

第5章では、質的研究における現場(フィールド)の重要性を指摘し、浄土真宗というフィールドに参入した理由を示した。

また老年期にある浄土真宗僧侶および門徒を対象とする理由について示し、現場への参入の仕方と研究者の立場について検討した。

第6章では、老年期にある僧侶への半構造化インタビューを実施し、浄土真宗僧侶が実際の死の臨床場面においてどのような宗教的関わりを行っているのかを明らかにした。

第7章では、老年期にある僧侶を対象として半構造化インタビューを実施し、浄土真宗僧侶が宗教教義の提供する聖なる物語をどのように引用することで死の意味づけを構築しているのかを、ライフストーリーのテーマと意味の源泉に着目することで明らかにした。さらに得られた結果を、物語構造や生成継承性との関連において検討した。

第8章では、老年期にある浄土真宗僧侶に対し半構造化インタビューを実施し、死後の理想世界という物語をどのように引用し、語りなおすことで自らの物語としているのか、そしてその物語によってどのように死者と生者が結びつけられるのかを検討した。

第9章では、関西圏内の老年期にある浄土真宗門徒に対し質問紙調査を実施し、死の意味づけと宗教性との関係についての予備的検討を行った。分析の結果、死への態度の因子構造が明らかとなり、宗教性、宗教行動、そして生涯発達過程における宗教との関り、との関係性についても検討した。

第10章では、浄土真宗門徒である1名の女性高齢者にインタビューを実施し、事例検討を行った。結果、家の宗教との関わりを通じた死の意味と生きる意味の関係的な発達プロセスが示された。また語りの空間という概念について検討した。

第3部、第11章では総合的議論として、本研究を通じて得られた知見をもとにナラティブ死生学の理論的枠組みを以下の視点を有するものへと再構成した。

第1に死と生の意味づけが、その多様性や矛盾を含んだまま物語全体の中でどのような筋に沿って語られるのかに迫ることで、意味づけの多様な「結び」を明らかにする。第2に宗教や文化が提供する聖なる物語をどのように引用しながら、また多様な意味の源泉とどのように関わりながら、死と生が意味づけられるのかを、語りの空間において描き出すことを可能にする。第3に個人の生涯にわたる死と生の意味を結ぶだけでなく、死にゆくものと遺されるものとの世代を結び、そしてより大きないのちの循環サイクルの中に個人の一生を位置づけることを可能にする。

さらにナラティブ死生学という枠組みが、生涯発達心理学および死の心理学に対してどのような意義を持つのかについても検討した。最後に、研究の課題および今後の展望について検討した。

氏名	川島 大輔
----	-------

(論文審査の結果の要旨)

本研究では、生涯発達心理学の観点から、老年期の大きなテーマである高齢者の死への態度という問題を取りあげ、宗教、特に仏教の中でも日本の文化的文脈と関連が深い浄土真宗との関連において、死がどのように意味づけされるのかを、その多様性と共に具体的に明らかにしようとした。

方法論的には、新しいナラティブ・アプローチによって、浄土真宗の僧侶と門徒に対して死の意味づけや物語を聞くインタビューを行って、質的心理学の手法で分析した。また、心理学の基礎的な手法である質問紙調査も併用して、宗教観と死の態度の調査研究による数量的分析も行った。

その結果、仏教の教義ストーリーに即した物語の仕方のほかに、私的なストーリーを併用する仕方や、それらの物語が世代をつなぐ生成継承性と関連することが明らかになった。また、生涯にわたる社会文化的文脈との関わりを通じて発達すると考えられる死の意味づけを把握するための方法論的検討を行い、質的研究法の意義を明らかにした。さらに、生涯発達心理学と死生学を統合し、ナラティブ・アプローチによって解明する「ナラティブ死生学」を提案し、その理論的枠組みを提示した。

本研究は、次の諸点において学問的価値が高いと認められ評価された。

- 1) 老年期になると死の問題は避けて通ることができないが、生涯発達心理学の立場から、老年期と死の問題をむすびつけて考える研究は、まだ少ない。欧米では死の研究は、死学 (death studies) によって扱われてきたが、生と死を連携させて考える死生学はまだこれからの領域である。老いや人生をいかに生き、いかに死と対処するかという問題は、未開拓の領域であるが、その新しい重要なテーマに果敢に挑んでいる。
- 2) 死の予期や死の受容のしかたや死の物語化の仕方には、長年人々が生きてきた文化的土壌やそこで語られてきた宗教的な物語と不可分の関係がある。死の心理学研究を宗教フィールドとの関連で研究することは、欧米のキリスト教文化圏では行われているが、日本文化では文化的文脈や物語の仕方の源泉という立場から宗教を扱う研究は非常に少なかった。老年期の死生観を宗教の物語と関連させて扱おうとしたことは、興味深い視点である。
- 3) 浄土真宗の僧侶の語りと、門徒の語りの両方を視野に入れることによって、宗教的教義に基づいた物語と、私的な体験に基づく物語など、宗教的物語の引用の仕方や重層的な利用のされ方や多様性が明らかにされた。

- 4) 死者と生者をつなぐ聖なる物語として「先に行って待っている」「また会える」「ひとつになる」など、より一般的な物語と関係させられる興味深いナラティブや意味づけ方の事例が見いだされた。
- 5) 当事者の意味づけを重視する新しいナラティブ・アプローチを用い、大量の語りプロトコルを丁寧に分析し、その分析方法や図表化の仕方にも多々工夫が見られる。方法論的にも新しい可能性を開拓しており、今後の研究法の発展に役立つ。
- 6) 高齢者の死の問題を、当事者の死の物語や、死の意味づけ方を、人生の物語（ライフストーリー）と重ねて見ていこうとするアプローチは斬新であり、「ナラティブ死生学」の提案は、今後の発展が期待される。

ただし、本研究には次のような問題点やコメントも指摘された。

本研究で得られた語りは、浄土真宗に特徴的なのだろうか、それとも日本の民間信仰やアニミズム的な物語も含まれているのだろうか。宗教のマスター・ナラティブや、より大きい文化的物語との関係が論じられていないので、研究の広がりや考察の奥深さという点ではもの足りなさが残る。

「日本人の死生観」や「アジアの霊魂観」など、より大きな学問分野にかかわる文献を読んで、それらとの関連の中で、自己の研究の拠って立つ位置を明確にすべきではないだろうか。

質的研究の対象は、どのように選ばれたのか、比較対照する方法をより明確にして、方法論を洗練させていく必要があるのではないだろうか。

「信じる」「結ぶ」「お迎え」などの用語は、どのように使われているのか、微妙で奥行きが深い領域をテーマにしているだけに、用語の使い方に厳密さと吟味が必要ではないだろうか。

しかし、これらの問題は、本研究の将来の展開に期待するものであり、本研究の学術的意義を損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。
また、平成21年2月19日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。